晴レルデ

重井中学の生徒たちに囲まれて
笑顔の村上美香さん

言葉が空を青くする

文・松井宏員 ― 写真・村上美香さん提供 ― デザイン・シマダタモツ

村上美香さんは今月1日、古里・因島の重井中学（広島県尾道市因島重井町）で、道徳の授業の教壇に立った。公民館での公開授業となり、44人の全校生徒だけでなく、保護者や重井町の人たち約30人も集まってくれた。

テーマは「郷土愛」。美香さんはまず、公民館から近い善興寺の墓地に一行をいざなった。昨夏の西日本豪雨で土砂崩れに遭い、500～600基の墓が流された。今もブルーシートが掛けられ、復旧は思うように進んでいない。

昨年の豪雨の後、現場を目の当たりにした美香さんは、こんなことを考えた。「ほかにも被災地がたくさんあるのに、私の古里のために募金を、って申し訳なさ過ぎてよう言わない。でも、この墓地のためならなんかできるかな」。そうしたら、墓地と骨（こつ）で「ボチボチコツコツ」というフレーズがひらめいた。「あ、これをイベントタイトルにしたら、いける！」

古里復興ってしゃちこばるんじゃなく、楽しく肩の力を抜いて、たくさんじゃなくぼちぼちとだけど、一役買える――。まさにコピーライターならではの発想だ。自社スタッフの力を借り、Tシャツなど多種多様のアート作品をバザール価格で販売し、墓地復興の募金に充てている。

美香さんは思うのだ。「私にできることって、言葉一つでネガとポジを反転させることかも」と。豪雨でぐちゃぐちゃになった自分ちのスイカ畑から、なんとか生き残ったスイカを給水所や学校などに届けた。その年のデコポンは、天候に加えて父親の体調不良などで手入れがままならず、キズ物や不ぞろいのものが多かったが、「このデコポンを可愛がってくれる人もいると思うよ」と友人が支えてくれたことから、注文してくれた人に「冬の寒波にも豪雨にも耐え抜いたデコポンです。違う個性を楽しんでくださいね」と手紙を付けた。

「マイナスの出来事を言葉で変えられる」。そんな言葉のチカラを教えてくれたのは、おかあちゃんだったと思う。大阪の美香さんに野菜やら果物やらを送ってくれる、その段ボール箱には必ず、メッセージがいっぱい書き込まれていた。「まめ（広島弁で元気）が一番」というおかあちゃんのポリシーはもちろん、「下ばっかり向いてたらいいもの書けないよ。空見てごらん」という、秀逸なコピーのようなフレーズまで。

「私のできることって」と美香さんは言う。「おかあちゃんからもらった『どこにいても島のことを忘れんでね』『下向いたらいけんよ』って言葉を届け直すことかな」。「今日どうしても元気がでない誰か」が、そうした言葉に触れて上を向いてくれたら、と。

「しげい帖」もそんな想いの中から生まれた。おかげで島の人とのつながりがグンと強まり、なにかと帰郷する機会が増えた。1年前にも中学の教壇に立ったから、その時の話を聞いた子たちが来てくれた。「10代の友だちができていくのが面白くて」と美香さんの声も弾む。

自分の大事な町を帳面に描いてみる「マチオモイ帖」は、全国に広がって展覧会も今年で9年目になる。まちおこしの一環になったりもしているけど、原点はもっとささやかな個人の想いなんだと改めて感じる。

「普段から周りの人に優しくする、声を掛ける。それが回り回って、自分の親だったり、おじいちゃん、おばあちゃんに届く」

美香さんは中学生たちに「そんな気持ちを持ってて」と語り掛けた。授業の後半は、生徒たちに作ってもらった重井町クイズ大会。クイズのお題になった駄菓子屋のおばちゃんらにもマイクを持ってもらって、美香さんの道徳の授業は和やかな空気に包まれた。

おかあちゃんから届いた言葉が
美香さんの原点